

# 若手がひらく 農の未来

## 第83回 中日農業賞

先進的な経営理念で地域社会に積極的な役割を果たしている若手農業者らを顕彰し、未来のリーダー育成を図る「中日農業賞」(中日新聞社主催、農林水産省と中部9県後援)の受賞者が決まった。内訳は農林水産大臣賞、中日賞各1人、優秀賞7人と、地域農業活性化などに貢献した特別賞1団体。贈呈式は3月1日に名古屋市である。高齢化や後継者不足など地域農業の課題に向き合う受賞者の取り組みを紹介する。



ふかした芋を持つ富永創治さん  
＝長野県中川村で

### 農林水産大臣賞

#### 富永 創治さん(40)

長野県  
中川村

主力のリンゴに加え、柿や芋など多品目栽培と生産サイクルの見直し、機械の積極的な導入で父から継いだ中山間地の農園を拡大させ、持続的な農業経営を達成した。

東京農大卒業後に就農した父の農園は売り上げの9割近くをリンゴが占めていた。家族頼りの経営で「朝早くから夜遅くまで体を酷使。このままだと維持できない」と限界を感じ、先進的な農業経営を学ぶと2008年に単身で渡米した。生産者が直接、消費者に販売するマーケットで汗を流し、研さんを積んだ。

09年に帰国後、繁忙期に収穫や加工が重ならない果樹を選んだ。観光バスの方々に協力を求め、設備投資で量産態勢を確保。社員も雇用した。今では15人が働き、多品目を1年通してできるようになった。天災などのリスクも低減。夏にサクランボ狩りの観光農園も始め、酒米の栽培にも力を入れる。冬季の収入源として干し柿のほかに干し芋の販路拡大を見据える。起伏の多い中山間地域での農業を「皆ができるように向上させていく」と励む。

観光バスの立ち寄りに協力してもらった地域の人や大学時代の友人たちが農園運営を助けてくれる。「発想があっても一人ではできない。手伝ってもらって今がある」と感謝の気持ちをおぼえる。

## 持続可能な経営 中山間地で達成

### 中日賞

#### 館 喜洋さん(40)

石川県  
白山市



精米機にかけるため、米を鍋に量り入れる館喜洋さん  
＝石川県白山市行町で

1986年に父が創業した農事組合法人「北辰農産」を2014年に受け継いだ。現在、高直売店を運営し、米を原料にした加工品を製造し、直売店で販売。6次化による複合経営に取り組み、地域住民の地を引受け、計58戸で営農する。重要な就労先にもなっている。

## 地域に根差し6次化

今後、「輸入資源に頼らず、地域の酪農家などから肥料を供給してもらい、地域内で循環した農業を形にしていきたい」と張り切る。

創業当時、地域農業の重要な担い手として、先進的な農業機械を、地域の農家と共同で利用する事業を展開していた。父が実践していた「環境に優しく、付加価値が高い米作り」との考えの通り、化学肥料や農薬の使用を削減する「環境保全型農業」に力を注ぐ。

これまで地域に根差した取り組みで信頼を得てきた。県内は今月1月、能登半島地震に見舞われ、農家にも被害が出た。「能登にも多くの仲間がいる。農業の復興、復興に向けても積極的に支援したい」

### 優秀賞

#### ニンジンの魅力PR



#### 永井 千春さん(39)

愛知県碧南市

「周りの皆さんと汗を流した日々が受賞につながり、うれし！」

29歳で実家の農業を継ぎ、ブランドニンジン「へきなん美人」などを栽培する。地元生産者有志で「人参・玉葱PR会」を立ち上げ、2017年には5道県の農家らと交流する「にんじんサミット」の初開催を支えた。代表を務める農業法人では収穫などの機械化、選果ラインの改良を進め、農家の労働時間短縮につなげている。

管理栄養士、野菜ソムリエ上級プロの資格を生かした食育活動に励み、企業と連携してニンジンを使ったパンや焼き菓子も開発した。もちろん原産地栽培。一種をまいて、育てて、いつもドキドキ、ヒヤヒヤです」と笑う。

#### 飼料や牧草 自給に力



#### 角守 仁さん(39)

岐阜県山県市

調理師やヘアメイクアーティスト、飲食チェーンでのマネジメント業務を経て、8年前に父の牧場を継いだ。飲食店勤務時、輸入品に頼る現状を不安に思ったことも背中を押した。酪農と県内種にこだわった肉用の肥育牛を生産しており、ほとんど休日がない大変な仕事。「それでも」と角守さんは言う。「食は基本。岐阜のおいしいお肉と牛乳を届けたい」

耕作放棄地で飼料を自給し、集積面積は約38畝になった。牧草は100%自給。他農家への堆肥提供にも取り組む。「山県は美しい。昔はもっと美しくかった。荒れた土地を減らして、整備された活気のある景色を取り戻したい」。循環型農業で、山県を支えていく。

#### 白ネギ栽培法 伝える



#### 本郷 一馬さん(40)

三重県鈴鹿市

地区内で白ネギ栽培方法の確立に貢献した。その技術を未経験の生産者にも惜しみなく伝え、白ネギの栽培面積の拡大につなげている。「全体的なレベルを上げ、鈴鹿産で県内シェア100%を目指したい」と意気込む。

20歳で祖父の代から続く茶栽培を継いだ。10年ほどして茶の価格が低迷したことから露地野菜の複合経営に挑戦。創設されて間もないJA鈴鹿白ネギ部会に加わり、会員と勉強しながら白ネギ栽培を始めた。県農業大学校にも助言を求め技術を磨き、生産量と品質ともに地域でトップクラスになった。白ネギ栽培は11年目を迎え、部長も務める。大手量販店の販売も増えて手応えを感じる。

#### 柿の長期保存に成功



#### 足立 章さん(37)

浜松市浜名区

農機具メーカー勤務を経て、浜松市浜名区大平で祖父の代から続く柿農園を継いだ。果実の鮮度を保持する包装フィルムや冷蔵庫を導入し、質の良い柿の長期保存を実現。出荷数の調整で大きく値下がりすることを防ぎ、持続的な農業経営に努めている。

生産者の高齢化が進む同地域。離農で耕作放棄地になりそうな圃場の管理や整備も担い、地域農業の維持に貢献してきた。コロナ禍で仕事も減少したという福祉施設の声を聞き、障害者に生産の一部作業を依頼。「農福連携」にも力を入れる。

今後は海外輸出を積極的に進める。「世界へ、日本の『秋』を届けられる農園になりたい」

#### 園芸に着目 収入安定



#### 正田 翔悟さん(39)

滋賀県彦根市

認定農業者による農地の集積が進み、栽培面積を今後拡大するのが難しい地域で、いち早く園芸品目に着目。付近では珍しいハウス栽培を取り入れ、ホウレンソウやコマツナの周年生産を実現させた。キャベツを中心に野菜と米の複合栽培で安定した収入を確保した。

18棟あるハウスの導入時は思い切ったと振り返る。地域で雇用し、食品ロスを減らそうと、大学生とともに規格外の野菜を使った商品開発にも取り組んできた。

大学卒業後、種苗メーカーでの海外営業を経て、親元で就農したのが32歳。「栄養価の高い野菜を作り、従業員の夢と一緒にかなえていくような会社になりたい」。経営者としての思いは広がる。

#### 農地を守る とりでに



#### 高橋 久明さん(38)

福井県坂井市

福井県坂井市三國町池上地区やその近隣の担い手不足に悩む農家の農地を借り受け、水稲や麦などを生産する「レイトベースクワイ」の代表を務める。

祖父から続く農家の3代目。地元土地改良区勤務などを経て、2018年に就農した。同社が管理している面積は、20年の会社設立以来増えて83畝に上る。

家業で酪農も営んでおり、耕種と畜産による循環型農業にも取り組む。

自らが生産する稲わらを発酵させた飼料を牛に与え、牛ふんから製造した堆肥を水田に戻すことで、農業やコストの削減を図っている。「自分たちが最後のとりでとなって、地元の農地を守りたい」と意気込む。

#### 品種倍増 需要に対応



#### 宮崎 雄介さん(41)

富山県砺波市

2006年に就農したブドウ農家。父から引き継いだ栽培技術に加え、従来の観光農園から、高級品種を中心とした贈答用ブドウの直売、カフェの併設といった大胆な経営転換を図り、新たな客層の獲得を実現した。

丸ごと食べられるシャインマスカットをはじめ、販売品種を父の代から2倍の30品種に増やし、食べやすさを求める客の需要に対応。販売単価を上げつつ、IoT(モノのインターネット)を活用した効率的な栽培を導入し、安定生産と品質維持につなげている。

今後の夢はオリジナル品種の栽培。感動するブドウ作りを目標に栽培技術向上に努め、顧客の期待に応え続けたい」と語る。

### 特別賞

#### 生産も裾野も広げる



#### 大東 宮農組合 前川 清代表理事(70)

三重県伊賀市

「大東の農地は大東で守ろう」をスローガンに地元農家らの呼びかけで2010年、農事組合法人「大東宮農組合」を設立。64人の農家が加入し、過疎化などで後継者不足が進む伊賀市大東地区で、米などを栽培している。地権者の委託を受けて地区内の7割の農地を組合で集約し、農業生産の拡大と農家所得の安定に寄与している。

女性活躍の場や高齢者の生きがいをつくらうと、手作業でも栽培できるタマネギなどを導入。住民や子どもを招いた収穫祭や農作業体験会などを開いて地域活性化にも取り組む。組合の前川清代表理事は「先人からの農地を守る」と力を込める。

### 暮らしの源 卓越した成果



能登半島地震で被災された皆さまに衷心よりお見舞いを申し上げます。暮らしの源である食料と農業の大切さを痛感し、その意味でも卓越した成果の受賞者を高く評価する次第です。

農林水産大臣賞の富永創治さんは、果樹栽培をベースに資源を有効活用する経営に取り組み、観光農園を拠点に地域の魅力を広く発信することに貢献しています。米国の学びの経験もあり、海外からの働き手を含めて、近未来に向けた農的な人材養成のリーダーになることでしよう。

中日賞の館喜洋さんは、環境保全型の大規模稲作を営みながら、餅や菓子の製造と販売でも多くの消費者を引きつけています。働く環境に深い配慮があり、優れた就業機会を提供している点でも先駆者の役割を果たしています。

特別賞の大東宮農組合は、農業生産に著実な成果を生むとともに、収穫祭や農業体験イベントなどを通じて、地域社会の活性化に尽力されている点が印象的です。積極果敢な姿勢は、あるべき農村の姿を示しています。

(生源寺真一・審査委員長)

【審査委員会】委員長 生源寺真一(東京大名大学教授)▽委員 新山陽子(京大名大学教授) 徳田博美(名古屋大学院教授) 野中章久(三重大学院准教授) 平光佐知子(コープあいち参与) 関谷健(関谷醸造代表取締役) 有賀博幸(中日新聞社編集委員)＝敬称略